

開放的な空間となっている開架室。高さを抑え、本が手に取りやすい配置となっている

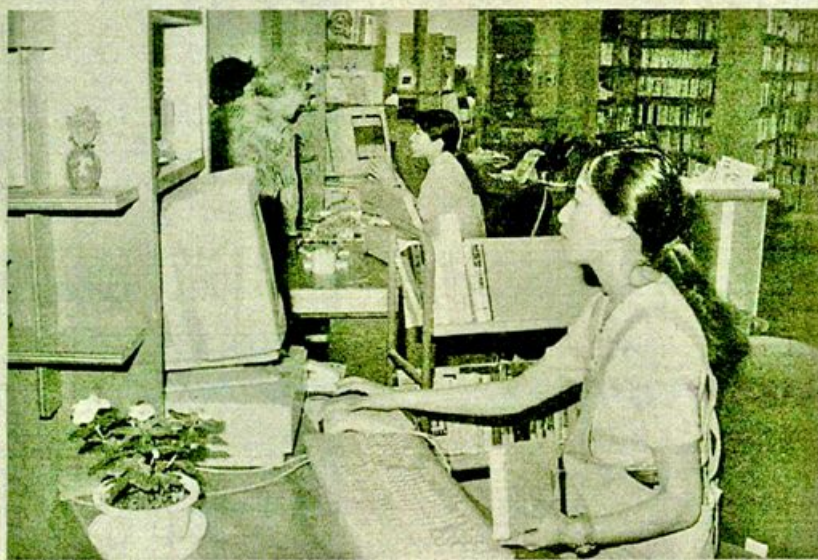
伊万里市民図書館

開館20周年

伊万里市 伊万里市民図書館が7日、開館20周年を迎えた。市民と行政が手を携え、「伊万里をつくり 市民とともに育つ 市民の図書館」の理念を实践してきた。理想の図書館を追求する先駆者として注目を浴び、現在も全国から視察が絶たない。

地域の知の拠点に

支援400人 市民とともに理想追求



図書館まつり前夜祭であった「いすの木合唱団」のコンサート。開架室にピアノがあり、館内にBGMが流れていることも開館当時は画期的なことだった。開館1周年のころの伊万里市民図書館。利用登録や貸し出し総数などの利用状況は全国トップクラスで、順調な滑り出した。

平成7(1995)年7月7日に開館した「市民の図書館」の源流は、1986年に発足した「図書館づくりをすすめる会」にさかのぼる。当時の「市立図書館」は学校の図書室程度の広さで、不満を募らせた同会のメンバーが市に新たな図書館建設を提案。市はそれに呼応して92年に図書館建設準備室を設置し、市民と学び合う「図書館づくり伊万里塾」を開く中で理解を深めた。市民の思いは寺田さんの描く設計図の随所に取り入れられた。使いやすい開架室だけでなく、市民が利用できるスペースを多様に備えることで、それまでにない発想の滞在型図書館が完成した。

運営では高い理想を追求した。重点項目の一つに司書の育成と個々の能力向上を挙げ、購入図書を業者任せにせず、司書が選ぶことで、地域の知の拠点としての価値を高めた。また、司書のレファレンス(資料や情報の検索・

案内)能力を生かし、陶製万華鏡や家庭用風力・水力発電の開発などのビジネス支援に成果を上げた。

当時の準備室長で現在は図書館長を務める古瀬義孝さんは「単なる貸本屋ではだめ。人づくりやまちづくりを支える施設として、レベルの高い図書館を目指した」と胸を張る。

市民との協働はずっと続いている。開館後に結成された支援グループ「図書館フレンズ(いまり)」は現在約400人。行政の補助に一切頼らず会費や古本市などの売り上げで独自運営するばかりか、図書館ボランティアグループへの助成金も出している。イベントの企画などのほか、図書館活動への提言も忘れない。それは減額が続く資料購入予算への苦言にも及ぶ。関係者は「図書館という帆船を動かす風のような存在」と説明する。

「成人式」を祝って3〜5日に開かれた「図書館まつり」には設計の寺田さんも駆けつけ、当時の関係者との「同窓会」を楽しんだ。閉会セレモニーで「この20年はいい時代を過ごすことができたが、今後は強い向かい風もあるかもしれない」と語り掛け、「備えよ、常に」の言葉を置きみやげにした。



図書館まつりの閉会セレモニーであいさつする設計者の寺田芳朗さん(右)と元館長の犬塚まゆみさん(左)＝伊万里市民図書館

(岳英樹)